

世界大学が目指す人間教育と理想の人間像* (1)

——ワーズワースの精神の神髄——

森 谷 峰 雄

宇宙の知恵と霊

は じ め に

私は最近、教育改革者コメニウスの『大教授学』を読み始めています。それは、彼が世界大学の理念の創始者と言われているからです。両者を較べて何とその精神が似ているのだろうか、と感嘆の声を放ったことがあります。1つは子供のような心の純真さを尊ぶこと¹⁾、2つはこの世の神との完全な断絶、墮落の認識です。コメニウスは次のように、書いている。

「神の・永遠の子 キリスト、私たちが造りかえるために天からつかわされましたキリストは、自ら この同じ道を いわば指さすように示しました。キリストはいっております、幼な子のわれのもとにくるのを許せ。これをとどめてはならぬ。なぜなら、天の王国はこのような者のものであるから（マルコによる福音書 第十章 第十四句）。私たちおとなにはしかし、なんじらは 心をあらためて 幼子のようになるのでなければ 天の王国にはいることはできないであろう、と申しているのです……おお、いとしい子どもたちよ、どうかこの・天与の特権があなた方のものであることを、さとしてほしいのです。ごらんなさい、私たち人類に残された誉れ つまり天の祖国への権利はすべて あなた方のものです。キリストは あなた方のものです。霊の聖化は あなた方のものです。……私たちおとな(adulti)は自分たちだけが人間であって あなた方は猿である、と考えております。自分たちだけが賢く あなた方は馬鹿だ、と考えております。」

（鈴木秀勇訳、『大教授学1』明治図書、36-37頁）

又、彼のこの世の墮落認識を表わす箇所を引用すると、

「申すまでもなく、自分の病気を知らない人は なおすことを考えません。苦痛を感じない人は、うめくことはありません。危険に気づかない者は、たとえ深淵や断崖に近づいても、おびえることはありません。これと同じように、いま人類と教会とを食いつくしている混沌に目を注がない人が 悩み苦しまないのも別にあやしむに足りないのです。けれども、自分

* 本論は1989年6月18日、小牧久時平和財団、世界大学、フランス国際大学、地球みどりの会連合主催「絶対平和への四段階連続公開講座」第三回分科講座で発表したものである（於京都大学楽友会館）。

も他人も数え切れないよごれにまみれていることを 一たん目にした人がいたとします。自分の傷やできものも他人のそれもますます可憐してきたことがまぎれもなく、そこから出てくる悪臭が鼻をつくようになったとします。自分も他人も実に危険な地割れや穴に囲まれ、じょうずに仕掛けられた罠の間をうろついていることが わかったとします。いやそれどころか、走っているところが 底知れない断崖のふちで、ひとりまたひとりと墜落して行く者の姿が 目にはいったとします。いったい このような人が おそろしさにふるえずにいられるものでしょうか。驚きのあまり 立ちすくまずにいられるものでしょうか。苦痛のあまり悶絶しないでいられるものでしょうか。

「現在 私たちの中に また私たちの人間の営みのなかに、なにか一つでも 本来あるべき場所にあるもの あるべき姿をとっているものが あるのでしょうか。どこにも 一つもありません。なにもかも さかだちし乱れ切って、崩れ去り、滅び去って行くのです。私たちは 認識の能力 (Intelligentia) を使って 天使に肩を並べるものにならなくてははいけなかったのです。ところが今はほとんどの人の場合にも、途方もない愚かさが この認識能力にとって代り、その結果 人間として必ず知っていなくてはならないものをなおざりにしている点では 獣と同じなのです。私たちは 思慮 (Prudentia) を働かせて 永遠な創造目的の永遠性にそなえなくてははいけなかったのです。ところが今は これに代って永遠性の忘却ばかりでなく 人間が死ぬことさえ全く忘れ去られ、ほとんどすべての人が、地上のもの うつろい去るもの いや 眼前に迫る死にさえも 自分をゆだねているのです。私たちは神から授けられた知恵 (Sapientia) を使って いちばん高い善のうちでもさらにいちばん高い善を見きわめて これを尊び またこの善を限りなくあまくあじわうことを許されていたのでした。ところが今は この知恵に代って、その中に私たちが生き動き在るところの神にたいして この上もなくいまわしいそむきが 見られます。神の・この上もなく神聖な力にたいして実に愚劣な挑戦が 行われています。人間どうしの愛情 (Amor) とまごころ (Candor) とには 憎み合い 敵意 戦争 殺し合いが いれ代っています。正義 (Iustitia) には 不正 不法 圧制 盗み 強奪が いれ代っています。純潔 (Castitas) には 心の思いと行いとの不潔とよごれとが いれ代っています。わだかまりのない心 (Simplicitas) と誠実 (Veratitas) とには 嘘、人をおとしいれる罠が いれ代っています。謙虚 (Humilitas) にはお互いに相手を見下し合う・ひややかな目と思いあがりとが いれ代っているのです。

「ああ、のろわれたる人類よ、こうまでも変わりはてるとは」。 (同、32-34頁)

天上の美しさを知ったものにとって、恐らくこの世の墜落は耐え難く、その悲惨は筆舌に尽くし難いでしょう。天界のすばらしさを味わった者にとってこの有様は如何に汚濁に染まっていることでしょうか。

続いて、ワーズワースも同じくこの世の墜落を述べている。 まもなく、幼児の魂はこの世

の重荷を持ち、習慣がその上に重くのしかかる」(『靈魂不滅の歌』130-31)「魂は生れた時は永遠の大海から、この浮世という海岸にうち上げられたのである。生れたときはまだ永遠の大海がすぐ近くにあるけれど、年がたつにつれて、人間は陸地の奥の方に入り込み、永遠界から遠ざかるのである」(同、166-68)。

現実の社会に対して、ワーズワースは次のように歌っている、

I nothing found

Then, or had ever even in crudest youth,
That dazzled me; but rather what my soul
Mourned for, or loathed; beholding that the best
Ruled not, and feeling that they ought to rule. (IX, 213-15)

(この世を最良のものが支配していないのを目撃し、
最良のものこそが世を治むべきであると痛感して、
嘆かわしく思い、嫌悪の情さえ抱いたものだった。)

where the Man who is of soul
The meanest thrives most, where dignity,
True personal dignity abideth not,
A light and cruel world, cut off from all
The natural inlets of just sentiment,
From lowly sympathy, and chastening truth,
Where good and evil never have that name,
That which they ought to have, but wrong prevails,
And vice at home. (IX, 353-61)

(そこでは、もっとも下劣な人間が、もっとも幅をきかせているのだ。
また、そこは、尊厳、つまり、
真に人間的な尊厳などはかえって通用せず、
澄んだ情緒の、ごく自然なほとぼしり、
つつましい思いやり、人の心を洗ってくれるような真実さ、
そうしたもののから一切きり離された、じつに
軽薄で惨酷なひとつの世界であり、またそこは、
善と悪とが、それぞれ本来の名称をすっかり取り違えて邪悪がはびこり、
悪徳が居すわっている場所なのだ。)

.....the crimes of few
Spread into madness of the many; blasts

From hell came sanctified like airs from heaven...

(X, 312-14)

少数のものの罪過は、
 大多数のものの狂気となって蔓延し、地獄の風も
 天上のいぶきのように正当化されて吹きすさんだ。

(『序曲』第10巻312-14; いづれも特に断りがなければ岡三郎訳を用いる)

詩人はこの世の、低俗の支配的な現実を知ったのです。これに対して、彼は幼児の魂の純真さについて、次のように書いています。「我々は栄光の雲を引いて神から来る、神こそは我々の住む処。幼児の時、天は我々を囲む」(“But trailing clouds of glory do we come / From God, who is our home: Heaven lies about us in our infancy!” (*Intimations of Immortality*, 64-66)²⁾。しかし、大人になってもこの純真な魂の失われぬ人もいます。彼は次のように歌っている。

人間の外面が、どれほどその見かけでは粗野であっても、
 そのこころの中では、どれほどしばしば、敬虔な祈りが
 なされていたろうか。それは、黄金で華麗に飾りたてられた
 寺院などとは似ても似つかず、日ざしや驟雨などから
 質朴な信徒をしっかりと守ってくれる、飾らない山中の教会に似ている。

(『序曲』第12巻226-30)

.....つつましい生活を観察する散歩の途上には、
 もっとすぐれた人間たちもいるのだ。深い瞑想に適するようにつくられ、
 引込み思案で、言葉のやりとりには不慣れな人達、
 魂はその胸の深く秘められていて、そうした
 親しい交わりの時にその魂が呼び出されてくるような、人当たりの優しい人達
 そうした人たちの語る言葉は、天上のことばにもふさわしく、

.....しかも

その一語一語は、彼らの魂のほんの補助役にすぎないのだ。
 あらん限りの力をつくして、その意味を把えようとしても、
 所詮、そうした意味はそこにはないのだ。以上のことを
 私は神への感謝として語っている。神は、自らつとめとして、
 われわれの心を養い、われわれが世間から全く無視されようとも、
 神はわれわれを心にとめ、われわれを愛し給うのだ。(『序曲』第12巻265-77)

こうして、詩人の心には「一つの新しい世界」(‘a new world’) (12巻371)が見えてくる。
 この一種の超越的世界が世界大学にある人びとの精神的世界と言ってもよい。

1

このように、実にワーズワースの精神はコメニウスのそれに本質的に類似します。かような詩人の精神の神髄を探ってみたいと筆者は思います。それはとりもなおさず、世界大学の理想とする人間像を探ることにもなります。彼の作品の中でも、とりわけ、*The Immortal Ode* は、彼の最高の傑作であろうとも言われています。今それを読み返して、この詩の中に詩者の心を温めるものがあります。英国の美しい風景と共に、人間愛が肯定され、それが素直に感じ取られます。思えば、私達は人間なのだ。人間の心を持った生きものなのです。だから、野に咲く花の中に、万感の思いを得ることが出来るのです。

Thanks to the human heart by which we live,
Thanks to its tenderness, its joys, and fears,
To me the meanest flower that blows can give
Thoughts that do often lie too deep for tears.

(ll. 203-6)

(吾等の生くる基なる人ごころあるがため、
その優しさ、喜び、恐れあるがため、
いとも卑しき一輪の花もこの身に与ふ
幾度か涙にあまる深き思ひを。

豊田 実訳『ワーズワース詩抄』（北星堂書店，S. 44），pp. 104-5.

私たちは人間であると言う事実を余りにも当然のように考えてはいないだろうか。人間であることの不思議さが、ことさら思われます。人間は天上の思いを奏でることのできる、存在なのです。上の詩行はその意識を高めてくれる。一輪の花を美しい天国の象徴であると感じることが出来るのは、まさに我われの心が神に由来する証拠です。これは、神（キリスト）と共にある人間が自然に対して感じる素直な思いでしょう。神の創造になる我々人間の心は神の心を写し取っている。神は又、人間に天国を思い出さすように、美しい自然を与えて下さった。だから、それを見て我われ人間は主の意志を知るのです。それは、すべてに耐える真理です。このような人間は、神から離れた人間社会の悪事に対して——彼らは墮落して地獄の人間社会を形成している——、天国に生きようとする。天国の平和を有している。又、悪に染まず、清く、正しく、美しく生きようとしている人間すべての生き様を歌っていると思われます。

この Ode の最初の部分には、

The Child is a father of the Man
And I could wish my days to be

Bound each to each by natural piety.

(「幼児」は「大人」の父、

自然を敬うこゝろにて

わが生くる日々結ばれよかし——豊田 実訳)

と歌われています。心の純真さこそ天国の鍵です。この世の腐敗、様々な欲求を超えて、神の与えて下さった 'innocence' (無垢の心) は宝物です。これによって、人は自然と神と、そして、天国 (永遠の祝福の住処) と結ばれるのですから。この大至宝を放出して、他の物を得たとしても、それは全く意味のないことです。一国の王となっても、命を失えば、何にもならない、とキリスト・イエズスは言われた。実際に、この世に、このような人々が多い。一国の王であることは、心の清らかさを去って、下らないこの世の権勢に走った人のことでしょう。だから、私達は、心して、小さくとも天国を受け継ぐ人間として、自然と一体となり、無垢の人間のまま留まっていよう。ここで、詩人に関する次の言葉を引用するのは適切でしょう、*The White Doe of Rylstone* (1815) において、ワーズワースは「一切は消え去る雲のようなものであるが、自然と、心と神の平和だけが永遠なるものなること」(佐藤清『Wordsworth』, 研究社, 114頁) を歌っています。彼は決して墮落した社会への改革の思想を捨てたのではないが、これが、彼のフランス革命から得た教訓であります。このような精神を世界大学の精神としよう。

さて、ワーズワースの書いた ミルトンの *Paradise Lost* に相当する作品と言え、それは、*The Prelude* (13巻) に違いない。一個の偉大な詩人の心を理解するには、やはり彼が精根を傾注してなした、作品によるに如かず。私はこの作品がワーズワース全体の生き方を表わしていると思う。この作品において、私が注目する点を先に言っておきたい。それは詩的創造精神と、魂の無垢、及びこの世の墮落分子という三つの観点である。この三点を中心にこの大作に取り組んでいきたいと思う。

2 そよ風の靈感

そよ風には、2つの意味があります。それは気象現象としての微風、もう一つは霊的な流れです。このそよ風は大変、重要な意味がある。それは単に、詩的精神というのではなく、人間の生の根本であるからです。この "breeze" は空気の流れという意味で「息」であると考えられます。人間がもともと生きた存在となったのは、神が粘土から作った形の中に息を入れたからです。

And the Lord God formed man of the dust of the ground, and breathed into his nostrils the breath of life; and man became a living soul (Gen. 2:7)

この“the breath of life”が人間の根本存在となります。これが永遠の生命につながる、「神の似像性」(“the image of God”)です。この「息」をヘブライ語では、“ruah”と言う。その意味は大きく3つに分けられます、

1. breath, 2. wind, 3. spirit. そのうち、1は breath of mouth or nostrils, breath of life, 2には wind of heaven, air, empty thing, 3には courage, prophetic spirit, spirit of the living, God's spirit (Fancis Brown et al., *Hebrew and English Lexicon of the Old Testament*, Oxford, 1968) 等である。ラテン語の spiritus は 1. a breathing, breeze, A. of God, breath, inspiration, B. The breath of life (Lewis, *A Latin Dictionary for School*, Oxford, 1964) です。以上の引用から分かることは、spirit にはそよ風、神の霊、生命の息の三つの意味を持っていることです。そして、これらはワーズワースの詩において、互いに意味的に補充し合いながら内容に深みを醸し出しています。

さて、聖書における人類の創造説は科学的にも正しいと思われます。土から人は造られた。土の物質と人体の物質は同じであると、科学者は言う(チンダル)。土に生命を与えた、恐らく、人間の頭では考えられないようなエネルギーの創造によるのだろう。最近の科学は超伝導とか、低温核融合によって、チンダルが予言した物質の巨大なエネルギーを示している。彼は肉眼でしか頼ることのできない顕微鏡の限界を知り、霊的な働きを認めているのである。それによって、彼は物質の中に地上生物の「希望」と「可能性」を認めたのです。

Beliving, as I do, in the continuity of nature, I cannot stop abruptly where our microscopes cease to be of use. Here the vision of the mind authoritatively supplements the vision of the eye. By a necessity engendered and justified by science I cross the boundary of the experimental evidence, and discern in that Matter which we, in our ignorance of its latent powers, and notwithstanding our professed reverence for its Creator, have hitherto covered with opprobrium, the promise and potency of all terrestrial Life.

from J. Bronowski, *The Identity of Man* (Aikusha, 1965), p. 5.

物質を持つ地上の生物の「約束」と「可能性」を動植物へと顕在化したのが、「神の霊」(創世記1の2)、すなわち、神の御子であった。この霊の受肉がナザレのキリスト・イエズスでありました。そして、現在神の御子は聖霊として、直接に人間の魂に宿って下さる。

ワーズワースはこのような、根源的な霊に触れようとしたのです。この霊は人間の生命を蘇らせ、精神を高揚させ、喜びをもたらせる。このことを、彼は第一巻で歌っている。

Oh there is blessing in this gentle breeze
That blows from the green fields...

.....
I breathe again;
Trances of thought and mountings of the mind
Come fast upon me...

(I, 19-21)

実に神の霊の力は自然に満ちている。この事実を、パウロは、“Ever since the creation of the world his invisible nature, namely, his eternal power and deity, has been clearly perceived in the things that have been made” (Romans 1:20)。この霊的力がワーズワースの霊に触れて、その霊に元気を回復させたのです。自然の霊ではなく、自然の中に生きている神の力がそうさせたのです。従って、彼は根本的に「汎神論者」(pantheist)とは異なる。彼は正確には「万有在神論者」(panentheist)であった(拙訳『ワーズワースの宗教』30頁、尚、佐藤 清, p. 108 参照)。

彼がここで“breeze”と称しているものは象徴的な「そよ風」「息」であって、その意味は霊的に把握され、感得される天上からの霊的エネルギーであり、それが人の心を無限に喜ばせ、また活気を与え、創造的にする(これは正に宗教的・芸術的靈感の融合である、拙著『ミルトンの芸術の理論的研究』上、1-19頁)。ワーズワースは歌っています。

For I, methought, while the sweet breath of Heaven
Was blowing on my body, felt within
A corresponding mild creative breeze...

(I, 41-43)

(というのば、あのすがすがしい天上の息吹が
私の五体に吹きつけるにつれて、私の内面に、
これに呼応するなごやかな創造的な風、
……はっきりと自分にも感じられたことだ。)

人の心を創造的にするのは、天上のエネルギーであり、これは世界の偉大な芸術の特色です。ミルトン然り、ホイットマン然り、テニソン然り、ロングフェロー然り、ベートーベン然り、メンデルスゾーン然り。しかし、この状態では、詩人(芸術家)の心に喜びを与えるのみであって、所謂芸術的創作は生起されない。これが大きなエネルギーとなり、そよ風ではなく、大嵐に到るとき、創作活動は行われます。

A vital breeze which travelled gently on
O'er things which it had made, and is become
A tempest, a redundant energy

Vexing its own creation.

(II. 44-47)

(いきいきと力強いぶきが、はっきりと自分にも感じられたことだ。
こうしてこの風は、自ら造りなした事物の上をゆますやかに吹きわたり、
やがてはげしい嵐となり、造化の営みをかきたてる。
溢れるばかりの原動力となった。)

ここで、ワーズワースは天上の霊は自ら創造した自然の上を吹くと言っています。この霊は先ほど引用した創世記の中の、生命の元なる神の霊なのです。これこそ、科学者が求めてやまない命の物質の原因ではないでしょうか。先在のキリストは、この霊でありたもうた。この霊が人間に喜び、愛を与えるのです。そのことを詩人は次のように述べます。

'Tis a power

.....
which.....
Brings with it vernal promises, the hope
Of active days, of dignity and thought,
Of prowess in an honorable field,
Pure passions, virtue, knowledge, and delight,
The holy life of music and of verse.

(I, 47-54)

このような神の霊の宿る存在は人間しかない。それ故に人間は神の宮と呼ばれるのです。人間の精神的活動のすべての積極的力はこの霊に由来し、ここから、偉大な芸術（科学）が生じるのです。

この聖なる息吹を受けて、詩人は芸術的待望を抱くことができます。

Then, last wish,

My last and favorite aspiration! then
I yearn towards some philosophic Song
Of Truth that cherishes our daily life;
With meditations passionate from deep
Recesses in man's heart, immortal verse
Thoughtfully fitted to the Orphean lyre...

(I, 228-34)

(そこで、最後ののぞみ、

かねて私が心に温めていた願い！ ひとびとの
日々の生をゆたかにはぐくみ、真実を歌う思想詩、人間のこころの
もっとも奥深い底から生れ、激しい熱情こめた思想をふくみながら、
まことオルフェースの豎琴にもふさわしい
不滅の詩こそ書きたいものだ、私は激しく心を躍らせるのだ。）

“Immortal verse”を創作することこそ、このような芸術家に共通する仕事です。ワーズワースが偉大である、と言えるのは、かかる原初のあるいは太古からあるいは永遠から存在する霊を志向し、それに触れたことにあります。観念的のみならず、実質的思考に生きる詩人の面目があります。彼は次のようにその詩的体験を歌ってます。

Wisdom and Spirit of the Universe!
Thou Soul that art the Eternity of Thought!
That giv'st to forms and images a breath
And everlasting motion!
(I, 428-31)

（宇宙の知恵よ、聖霊よ！
そなたは永遠に実在します思想！
世界の事物と形像とに息吹をあたえ、
永劫の運動を生み出すもの！）

宇宙の知恵と霊、これをワーズワースは観念的に歌い上げるのではなく、人格的对象として見ているのです。知恵と霊は一体となって把握されます。ああ、この宗教的体験のこの世ならぬ、霊の喜びと祝福。万物は喜びに輝いて見えます。この時、ワーズワースは何を知ったのか。この霊がすべての生きもの源であるということです。逆に、すべての生きものはこの霊の形態化です。すべての生きものにはこの意味において霊があます(植物にも)。この霊を彼は観念的ではなく、実体として認識しています。霊が先行し、体はそれに続く。この思想こそ物の本質を明らかにします。古来の思想家はこのように考えてきたのです。それが最高の域に達したのが先在のキリストの受肉です。スエーデンボルグも次のように述べております。「それ故に主はこの世に來られた。そして文字通りの意味で「言葉」あるいは、究極における神の真理となるために、人性を着られたのです。それがゆえに、『言葉は肉となった』（ヨハネ1の14）」(De Verbo, p. 37)。ナザレのイエズスこそ宇宙の霊の受肉であったのです。彼は復活されて、人格をもって天国におられます。しかし、その太初(初)の霊は今でも存します。それが三位一体です。御子、御父、御魂は全く同じです。それだからこそワーズワースはこの霊を直接に感じ取ったのです。人が頭の中であるいは文献を通して、詮索するのではない。自然という大書物の

中で真理を読み取ったのです。これが自然と共に生きる真理の人の共通の認識です。ゼミナールの学生と共に遊んだ金閣寺のパンフレットに、「咲く花の 露のみずけき／鳴く鳥の 声の さやけさ／誰が説きし、無字の経」とありました。しかしワーズワースは自らもっと深く進んで、その源なる霊に迫って、宇宙の実相に触れているのです³⁾。

人も他の動物と同じ霊があるのではない。人間には神のイメージがありますからこそ、神の心を自ら知るようになるのです。又、そのような霊を与えられたのです。植物も動物も程度の差こそあれ、同一の神の力を表わしています。しかし、人間はやはり他の生物とは別個に造られたことを知るべきです。すなわち、神の似像性としての責任を持つ。他の生物のように、直接神に栄光と知恵を表わすのではない。自らの意志、愛、思想、行いによって自発的にそれをなすように、造られたのです。そのことをワーズワースは歌っています。

not in vain,
By day or star-light thus from my first dawn
Of Childhood didst Thou interwine for me
The passions that build up our human Soul,
Not with the mean and vulgar works of Man,
But with high objects, with enduring things,
With life and nature, purifying thus
The elements of feeling and of thought,
And sanctifying, by such discipline,
Both pain and fear, until we recognize
A grandeur in the beatings of the heart.
(I, 431-41)

(私の幼年期の明け初めのときから、このように
陽のひかり、星のあかりのもとで、そなたは
私のために、人間の精神を構成する情操を、
けっして低劣なものでなく、卑俗なものでもなく、
気高いもの、不滅なもの、そして
生命と活力とで、みごとに織りなしたまい、
感情の内容、思想の内容、その一つ一つを淨めたまい、
その薫陶によって、私の苦痛も恐怖も高らかな尊いものとなしたまい、
そして脈搏つ人の心の中に、偉大さがあることを
ついに我々にも、はっきり自覚できるようになしたもうたのだ。)

人間自らの心が清くなり、そして、創造主により近付いていけば、その人は人間の心、心臓

の鼓動の中に、グランジャー「壮麗さ」を認識することができます。この心は人類普遍のものであろう。ワーズワースは、都会の人々よりも、ハンブルな、人々の間にこの、Grandeurがよりよく保たれていると考えています。A *Preface to Lyrical Ballads* (1802) に次のような言葉がみられます。

Low and rustic life was generally chosen, because, in that condition, the essential passions of the heart find a better soil in which they can attain their maturity, are less under restraint, and speak a plainer and more emphatic language; because in that condition of life our elementary feelings co-exist in a state of greater simplicity ... being less under the influence of social vanity they convey their feelings and notions in simple and unelaborated expressions.

Stephen Gill ed. *William Wordsworth* (Oxford Authors, 1984), p. 597.

平凡な人々の暮らしの中に人間の心の壮麗さを認めることができる。人間の心にはこのように、神に由来する気高い心が存する。しかし、ワーズワースの特徴は、このような精神は「低い田舎の生活」(Low and Rustic Life) の中により善い土壌を見出していることである。これはとりもなおさず、自然の人間に与える精神的影響が大きいということである。詩人がその生涯、心に一つの明るいとし火を灯し得たのは自然のお陰であると、歌っている。

if in times of fear,
This melancholy waste of hopes o'erthrown,
If, 'mid indifference and apathy
And wicked exultation, when good men,
On every side fall off we know not how,
To selfishness, disguised in gentle names
Of peace, and quiet, and domestic love,
Yet mingled, not unwillingly, with sneers
On visionary minds; if in this time
Of dereliction and dismay, I yet
Despair not of our nature; but retain
A more than Roman confidence, a faith
That fails not, in all sorrow my support,
The blessing of my life, the gift is yours,
Ye mountains! thine O nature!

(II, 448-62)

(もしもこの不安な時代に、
一切の希望が挫折している、この憂鬱な荒地において、
もしも現代の無関心と無感動と
邪悪な興奮のうずの中で、善良な人々が
いたるところで、わけもなく墮落し
利己的になり、また、平和とか穏健さとか
家庭的な愛情などという美名に酔わされてしまい、
そのくせ、幻想的精神の持ち主たちにむかつては
冷笑すら好んで交えているような時代に、
もしもこの怠慢と狼狽の現代において、それでもなお私が
人間性に絶望せず、あのローマ人のような自信にもまさる
不拔の信念、まことに不壊の信仰を抱いて、
あらゆる悲しみに際しても、自分の支えを、そして
自分の生活のよろこびをもっているとすれば、まさにその贈物こそは
そなたたちのもののなのだ。汝ら山々よ！ おお大自然よ！)

たとえば、私は今日朝早く、庭に咲く純白の小さいどくだみの花を見まして、そこに、純真汚れない神の御子の形姿を見ました。この宇宙にはこのような、汚れない心が支配しているのだ、と覚りました。そして、その贖罪の有り難さに、感謝の念が祈りの内に込み上げてきまして、神の愛、キリスト（救い主）の愛を心から讃美せざるを得ませんでした。

ミルトンもワーズワースも、コメニウスも、同じく人間の理想を掲げた人々たちです。しかし、教義的でなく、自分の根限りの生活を通して真の神学に到達したのです。頭ごなしに、神学から出発したのではないのです。そして、この大作『序曲』の結論、いわば、ワーズワースの最後に到達した、思想理想を次のように歌い上げております。これこそ、世界大学の理想でもあります（紙面の都合により、残念乍ら原文を省略する）。

たとえ、現代が真理の道を歩むには、
あまりにも弱腰のために、古い偶像崇拜にたちかえりつつあろうとも、
たとえ民衆が、潮の退くように再び、たちまちのうちに
奴隸的屈辱の状態にもどり、それぞれの国家ごとに
汚濁と恥辱の淵に転落してゆこうとも、それでお、
私達は、現在もっている認識のうちに慰めを見出すことが出来、
真の幸福にあずかることができるだろう、もし私達が
より強い信頼の持てる日を、互いに促進し合い、
人間の救済という、まさにこれからの仕事に

(もし天の配慮で、そのような恵みが私達に与えられるなら)
二人で手を携えて従事することが出来さえすれば。
大自然の予言者としての私達は、彼らに語りかけるだろう、
理性と真理とによって、神聖なものに純化された
あの永続的な靈感を。そして、二人が心から愛してきたものを
彼らも愛するようになるだろう、また彼らにその経過を教えよう
どのようにして人間の精神が、住んでいるこの大地よりも
幾百倍も、さらにさらに美しくなるのかということ、それからまた
事物の構造（それは、人間の希望や不安の
あらゆる転変のさなかにも、依然として、何ら
変化することのないものなのだが）それよりもさらに
神聖な実体と構造とを、この精神自体がもっているために、
事物よりもさらに美しく高められるのだということ。

(『序曲』13巻431-52)

ここに、世界大学の理想精神があります。世界大学の文化とは、人類が考え出した最も善い理想思想のことを言うのである。そして、世界大学とはそれを受け継いでいく人材を養成する高等教育機関である。最後に、世界大学の源であり、同じ理想を掲げている、コメニウスから引用したい。

私たちの主なる神よ、私たちの誰もができる限りあなたの栄光に仕えることができますように。よろこびに踊る心臓を私たちに与えて下さい。申すまでもなく、偉大と権力と栄光と勝利とはあなたのものです。天と地にあるものはすべてあなたのものです……私たちは、私たちの父と同じく、あなたの目かられば、異邦人旅人であります。地上での私たちの日々は、いわば影に似て、地上には永住の家はありません。私たちの主なる神よ、あなたの・聖なるみ名をあがめる準備はすべてあなたの手からでるのです……

主よ、私たちはあなたの中に希望をおきました。

私たちが永遠に迷い続けることは

ないであります。

アーメン

鈴木秀勇訳、『大教授学2』p. 153。

注

- 1) ここで、幼児の魂の美しさまたその救済を、スエーデンボルグはつぎのように美しく表現している。
“In the spiritual world all infants are led by the Lord into angelic wisdom, and by that into heavenly love by means of representatives of spiritual things which affect the interiors of their mind with pleasure; and finally by means of truths of wisdom and so by goods of love”

(*Divine Providence*, p. 136).

2) この部分の訳は佐藤清『WORDSWORTH』(研究社, S. 55), 85頁から引用。

3) 次の詩篇 *The Tables Turned* を参照せよ。

①

Up! up! my friend, and clear your looks,
Why all this toil and trouble?
Up! up! my friend, and quit your books,
Or surely you'll grow double.

②

The sun above the mountain's head,
A freshening lustre mellow,
Through all the long green fields has spread,
His first sweet evening yellow.

③

Books! 'tis a dull and endless strife,
Come, hear the woodland linnet,
How sweet his music; on my life
There's more of wisdom in it.

④

And heark! blithe the throstle sings!
And he is no mean preacher;
Come forth into the light of things,
Let Nature be your teacher.

⑤

She has world of ready wealth,
Our minds and hearts to bless—
Spontaneous wisdom breathed by health,
Truth breathed by cheerfulness.

⑥

One impulse from a vernal wood
May teach you more of man;
Of moral evil and of good,
Then all the sages can.

⑦

Sweet is the lore which nature brings;
Our meddling intellect
Mis-shapes the beauteous forms of things;
—We murder to dissect.

⑧

Enough of science and of art;
Closes up these barren leaves;
Come forth, and bring with you a heart
That watches and receives.